

115行以下卷末までの五十六行は概して對觀福音書(Synoptic gospels)に據つて、マリヤ懷妊の事より、耶蘇の生涯の梗概を述べ、且つ多少之を敷衍したものである。此の間にも難解の字句多く、文字の誤脱も多いこと疑無いが、その大意を取ることは左程困難ではない。委しい讀解はこゝには避けて、たゞ此の間に於ける特種の語について管見を施すことにする。

先づ注意すべきは初めの「涼風」といふ語である。此の語はこの續きなる116 117行等の外、別に134行にも見え、馬太傳以下の福音書と比較して見れば直に解し得らるゝ通り、聖靈(Holy spirit)の事をいうたもので、摩尼教の漢譯^②經典及び一神論に淨風と記したものに當り、三威蒙度讚にも同一語を用ひて慈父明子淨風王と見えてゐる。神とか靈とかを風に喩へることは聖書中にも諸所に見え、例へば約翰傳^{三ノ}八に「風は己が任に吹く、なんぢその聲を聞ども何處より來り、何處へ往を知らず、すべて靈によりて生るゝ者も此の如し」と記されてゐる。此の殘卷の初めの部、即ち6、7行以下にも、「天尊顏容似風、何人能得見風」と見え、殊に12、13行に「世間人等誰知風動、唯只聞聲巔、一不見形、云々」とあるのは此の一節に應ずるものであらう。

末艷(116、117、120)。此の二字の唐代の音は *mwat[mwar]-yām* であつたであらう、そうして勿論聖母マリヤの音譯に違ないが、論述者は果して何れの國語からこの形を寫したものであらうか。景典が本來シリヤ語で書かれたものであることは普通の説であるが、唐に來た景士には諸國の人があつた事であるから、此等の人必ずしもシリヤ語を基にしてかゝる音譯を施したものとは限らない。但しマリヤといふ言葉は古いシリヤ語や、また近時の發掘に依つて得られたソグド語パーラ非語等で書かれた景典^②に於て皆 *maryam* の形に一致して居るから、此等の中の一